

## 憲法9条と私 1



# 戦後 60 年 問い直す命の重みを 寺岡敦子

2 年ほど前、学生時代の安保闘争の頃の論客だった友人から、某大学名誉教授がある情報交流誌に投稿された記事のコピーが送られてきた。それには、日露戦争から始まって太平洋戦争に至る九条がまだなかった旧憲法時代の日本の、戦争による死者（住民の空襲による死者も含めて）の数が綿密な調査にもとづいて記載されていた。詳しい数字が今手許にないが、太平洋戦争だけでも 300 万人近くで、すべての戦争を合わせるとその何倍にもなっていて、1 千万人近い死者数だったと記憶する。それに対して、九条ができてからの 60 年間には戦死者がゼロだというその対比が印象的で、憲法九条の存在はこの一事をみてもかけがえがないということになる。これだけの死者を出した大戦から私が幸運にも生きてこられたということにも、思いを深くした。

5 歳で終戦を迎えた私には戦争の実体験というのは余りないが、昨年は終戦・被爆 60 年というので全国各地であの大戦を風化させないための取り組みがさまざま催された。幾つかそれに参加した報告をまとめ、日ごろ日記代わりに書き留めている我流俳句も読み直してみた。

### 旭区「戦争と平和展」

私の住む大阪・旭区で数年前から旭平和委員会による「戦争と平和展」が夏に開催され、一

去年は医師の講演で、湾岸戦争で使われた米軍の最新鋭兵器による後遺症（特に子供への）が悲惨な写真とともに紹介され、アメリカがいかにか非人道的な戦争によって世界支配を進めようとしているかを痛感した。去年はその展示への俳句による協力を頼まれ気軽に応じたものの、季語のない俳句を作る勇氣はないので、社会性を生かしながら季節感を取り入れることの難しさを感じた。結局、音節の短い「夏」という季語しか思い浮かばなかった。

『 九条よ 永久に生きよと 集ふ夏 』

### 信州平和の旅

これも旭区の女性たちに誘われて、信州ちひろ美術館とその周辺の戦争遺跡などを巡るツアーに参加、ちひろ美術館はおなじみの絵やグッズで楽しんだが、引き続き訪れた二カ所での見聞は驚きと感動の連続だった。一つは長野市にある「松代大本営跡地」、敗戦直前に本土決戦に備え、強制連行朝鮮人を含む延べ300万人の労働者による突貫工事で掘り進められた、山の奥深く長さ10キロメートル近い巨大シェルターである。ここへ軍の中核と天皇皇族が避難する予定で、当時の2億円（今の数千億円）が投入された。軍はこの工事を完成させるため、沖縄での地上戦で時間稼ぎをしていたと言われる。これを見て、支配者による戦争は決して国民を守るためでなく、少数の利権利欲のためになされるものだとということを実感した。

『 大戦の 避難窟跡 散り紅葉 』

二つ目は上田市にある「無言館」、大戦の学徒動員で亡くなった画学生の遺作・遺品を集めた美術館である。館内は薄暗く何の案内らしいものもないが、一つ一つの作品からの問いかけとそれに付された添え書きは涙なしに見ることができず、あと5分あと10分、絵を描きたいと思いつつ戦地へ赴いた若者たちの無念の叫びが伝わってくるような気がした。死者の絵が無言のままに、現代の私たちに饒舌に語りかけ愛憲を訴えているのだ。

『 秋深く 戦没画学徒 遺作展 』

### 3.1 ビキニデーに参加

上述の旭平和委員会で3.1ビキニデーへの参加者を探していて、日取りの都合がついたので協力、原水禁運動を一から勉強し直すよい機会になった。1954年に久保山愛吉氏はビキニ環礁でアメリカの水爆実験により被爆、数ヵ月後に白血病で亡くなる。実験は6回に及び、彼のみではなく800隻以上の日本漁船が被爆、広島・長崎に次ぐ3度目の被害に対して日本中に怒りが広がり、3400万名もの署名が集まって、翌年（1955年）から原水爆禁止世界大会が開かれるようになったという。今回のビキニデーは1000人もの参加で、平和行進の後お参りした久保山氏の墓地には、「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」という氏の言葉が大きく掲げられていた。

『 冬薔薇供へ ノーモア・ウオー の声 』

### BSE問題、九条と根っこは同じ

当団体の会員であった高谷さんに誘われて、米国産牛肉輸入再開問題に取り組むことになり、

BSE や vCJD のことを詳しく知り、またその政治経済的背景に関する情報を得るうちに、これも憲法九条を変えようとする動きと根っこは同じだと気がついた。建築法、健康補助食品など同類のものは多々あるが、「拒否できない日本」はそれぞれ米国の求めるままに国内規制を緩和して（全頭検査の緩和）、米国産業が日本市場に入り込み植民地的経済支配が進むことに唯々諾々としている。「BSE 市民ネットワーク」は、牛の着ぐるみをまとい、今年の憲法集会で大阪と京都それぞれにチラシを配り、輸入再開反対を市民に訴えた。

『炎昼に集ふ 憲法記念の日』

今年に入って、成田空港での輸入米国牛肉への脊柱混入事件により、市民の関心は一層高まっているが、これらの運動経過は別個に「めざして」に投稿したいと考えている。

戦争体験の少ない私であるが、大阪に事務局のある「反戦反核平和を願う文学の会」が昨年第20集目の詩歌句集を出すために作品を募集した際には、無謀にも応募した。

『敗戦の 五歳の春の 夜空灼け』

『忌を修す 戦抜け生きし 父と母』

秀句も駄句も応募作品はすべて掲載されたようである。大阪大空襲の中を誰かに抱かれながら逃げ惑った夜空の火の色は「焼」という文字では言い尽くせないと、辞書を探して「灼熱地獄」の「灼」の文字をあてた。今思えば焼け出されて家財一切を失った父母が、4人の子供を育ててよく生き抜いてくれたと、亡き二人に感謝する思いが年々深くなる。